小松同窓会会報

第 15 号
発 行
小松同窓会本部
〒923－0903
小松市丸内町二ノ丸15
石川県立小松高等学校内
同窓会報編集委員会
印刷　北騰印刷株式会社

謹賀新年
平成十年元旦

現代文明の落とし穴

勝木育夫

最近ダイオキシンや地球温暖化がクローズアップされ、文明による人類の幸福と将来の不安についての論議が盛んになってきた。

今日、環境問題に大きく関心が持たれるようになったことは喜ばしいが、まだまだ縦割り行政の弊害から、問題も多い。このことについては書き出すと長くなるので、ここでは表題に沿って、前に読んだ本の中からその典型的な例を紹介してみよう。

開発が大きな被害を齎らした例としてはアスワンハイダムの建設がある。

エジプトの母ナイル河は七千キロメートルの長さ、流域面積約三百万平方キロメートルの大河である。両岸には幅十キロメートルにわたって肥沃な農地がある。河口には広いデルタ地帯があって、六百万人の人々の生活を支えている。

このナイル河の河口から千キロメートル上流の町アスワンに一九六〇年から、十年以上もかけて、高さ百十一メートル、長さ三千五百メートルという巨大なダムが作られた。それがアスワンハイダムである。このダムの建設に伴って、アブシンベル神殿の移築も行われたのが特に話題にもなった。このダム建設によって二百万キロワットの発電能力を持ち、エジプトの未来に明るい光と夢を与えたのである。

ところがこのダム建設は大変な環境破壊をもたらし、エジプトの経済に逆に大きな負担をかけるものだということが解ったのである。

ナイル河は毎年規則的に氾濫を起こし、洪水が引いた後に肥沃な土壌が農地に残されていたし、洪水を利用して灌漑用水路が網の目のように作られていた。この洪水が四千年もの昔にエジプトに幾何学や測量の技術の発達を促したものでもある。ところがダムができてからは、上流から肥沃な泥土が運ばれなくなり、洪水も起らなくなった。ナイル河周辺の農地には化学肥料を施さねばならなくなり、その肥料を作るために必要な電力はダムの発電量を上回るとさえ言われている。新しく灌漑用水路を建設しなければならなくなった。その上洪水がなくなってから、下流の広い地域にわたって地中深くにある塩分が滲み出てきて塩害が起るようになったし、寄生虫が大量に発生するようになった。河口のデルタ地域も早いペースで消滅しつつある。予想では二〇五〇年にはデルタ地域は河口から三十キロメートル近くまで海面下に没し、エジプトの全農地の約十五パーセントが消滅し、八百万の人々が定住地を失って環境難民になると考えられている。またダム建設はナイル河口の漁業にも致命的な打撃を与えてしまった。以前は河口には大量のプランクトンが生息し、地中海で最も豊かな漁場だったのに、ダム建設後はナイル河の水は澄んでしまってプランクトンが育たなくなったからである。

そのため、エジプトは現在食糧の半分以上を輸入に頼っている。エジプト政府はこのダムを破壊することも考えたが、余りにも頑丈にできていて断念せざるを得なかったという。

アスワンハイダムはこのように巨大な経済開発が自然環境を大きく破壊して経済社会にも取り返しのつかない打撃を与えることになったのである。（岩波新書、宇沢弘文著「地球温暖化を考える」による。）

このような悲劇は決して例外ではない。規模こそ小さいがダム、干拓、道路（特に林道）、ゴルフ場の建設等によって同じようなことが至る所で見られるのである。

今日、環境問題が大きくクローズアップされてきたことは、明治から大正にかけて工業の発展と共に、労働者を劣悪な環境で働かせて女工哀史を引き起こし、結局は働き易い環境や健康管理等が産業の発展になることが解ってきたのと一面で似ている。ある時点で最良と思われたことが、状況が変わるとその価値が下がったり、時には悪になることもあり得るのである。

これらのことは、実際には難しい点も多いが、出来るだけ巨視的で柔軟な視点にたって物事を進めるように務め、問題があれば直ちに修正する必要があることを教えてくれるものである。（中学45回）

創立九十八周年記念講演会要旨

「人皆同じ」

―商社マンの見た世界と日本―

プリマハム(株)代表取締役社長
坂井光男(高校11回)

私は、一九五六年から三年間ここ小松高校で過ごしました。高校時代、鈴木先生(校長)によって書かれた「きたれ京都大学へ」と言う言葉に刺激され、京都大学に進み経済学を専攻しました。

大学在学中、日本はすでに成長路線に入っていました。その頃、ロストウ博士の「経済発展段階論」を学び、いずれアジアの時代がくると感じました。さらに、当時の日本は国際化に向かってスタートしていたので、日本の国際化を先導していくのは商社だと思い伊藤忠商事に入りました。三十四年間商社マンとして世界を走り回り、今年の春からはプリマハムの社長をしています。

今日は、二十世紀後半の五十年で私が経験したことから学んだことを中心にお話しといと思います。

まず、地球の歴史・人類の歴史を簡単にお話しますと、約四五〇億年前に宇宙でビッグバンが起こり、地球ができ、生命が誕生します。やがて、ホモサピエンスが文明を生み、世界の中心はエーゲ海、イギリス、アメリカ、日本へと移り変わり、日本は今世紀後半遂に経済大国となったのです。世界の中心は更に西へと移動し、次は中国の時代になると思います。

今世紀を見ると、列強が中国やアジアを植民地化した帝国主義時代、次いで第二次世界大戦後の東西冷戦時代、そして冷戦が終わり、その後にきたのが現在の経済大競争時代です。

一九六三年に伊藤忠商事に入社して、最初に配属されたのが羊毛部で、ここに十四年間いました。この時感じたのは、華僑がネットワークで瞬時に情報交換を行っていることの凄さです。貿易は情報が勝負です。

創立記念講演　坂井氏

一九七七年、人事部に移り先ず人事考課を担当したが、人事考課での点数とは「人の上に人を作り、人の下に人を作る」もので公正を期さねばならないストレスの多い仕事でしたが、ストレスがたまると宇宙から自分を見直してみることでストレスを解消していました。ここでは、伊藤忠で初めて韓国籍の人を採用したり、六月から七月にかけて仕事が空くのを利用して、世界に一六〇カ所ある支店を見て回り、異文化を嫌という程体験しました。

人事部からナイロビ駐在となり、東アフリカ十六カ国の事務所を総括する仕事をしました。その頃のアフリカ諸国は政治的に不安定で、あちこちでクーデターや部族間の争いが起こっていました。だから、駐在員や出張員の安全に気を配りました。また、政府開発援助(ODA)では、ケニヤ、ジンバブエ、タンザニアなどで通信施設や学校、水田などを作りました。ケニアにも泥棒はいるが、見つかれば逃げる程度で、日本のような強盗殺人は希でした。アフリカ人は黒人だから程度が悪いと思っている人がいますが、私の知っているキバキと言う副大統領などは、頭はシャープで論理的、しかも、ユーモアがあって雄弁で親しみやすく、愛敬があります。このような立派な人がアフリカには沢山いるのです。

この頃日本では、バブルがはじけて株価や地価が暴落し、一九七三年のオイルショックと同じような状況にありました。物の道理で上がり過ぎた物は必ず下がるのです。株のように汗をせずに得たお金を〝浮利〟と言いますが、人は浮利をおってはいけないのです。

一九九一年に東京に戻り情報通信システムの仕事を担当しました。当時一二〇億を費やしていた費用を二割削減することに成功したのは、私が、コンピュータに関して素人であったことがよかったのです。

この仕事を二年間で終え、ソウル支店長として、韓国で二年過ごしました。韓国は、近くて遠い国と言われていますが、隣同志でありながら異なる点が沢山あります。まだ儒教の教えが残っていて、家族や一族を大切にします。同姓の男女は結婚できませんし、結婚後も互いの姓は変わりません。だから、韓国では日本とは逆で、結婚後は相手の姓

を名乗れるようにして欲しいと言う女性運動があります。また、韓国では日本海を〝東海〟と呼んでいます。

次の九州での二年間は、中国鉄道とJR九州の業務提携や上海駅と博多駅の姉妹駅提携など、アジアと九州の交流に力を入れました。

そして、今年の春からはプリマハムの社長をしています。

最後に、二十一世紀を生きる皆さんにいくつかのヒントを申し上げたいと思います。

一つ目は、相手をよく理解することです。二つ目は、相手、特に異文化持った人を理解するとき、相手の文化に迎合するのではなく、まず、自己が確立されていることが大切です。三つ目は、変化の激しい時代は、いつも原点に戻ることです。そして、四つ目（結論）は、〝愛〟です。釈尊の言う慈悲の心、人、動植物、地球を愛すること、思いやることです。

二十一世紀に向かって胸を張って進んで下さい。

講師略歴

昭和15年8月生まれ　能美郡寺井町出身
小松高校11回卒（昭和34年）京都大学経済学部卒
昭和38年4月　伊藤忠商事（株）入社　羊毛部勤務
52年1月　同社　人事部
62年4月　同社　ナイロビ事務所長
平成3年6月　同社　情報システム企画部長
5年6月　同社　ソウル支店長兼釜山事務所長
7年6月　同社　九州支社長
8年6月　同社　取締役
9年4月　同社　常務取締役
9年5月　プリマハム（株）顧問
9年6月　同社　代表取締役社長（現）

好きな言葉

路漫々（ローマンマン）　其修遠兮（キーシュウヤンシィ）　吾将上下（ウージャンシャンシィ）　而求索（エレクイジー）　（屈原　録楚辞内）

道は遙けくその旅路は険しく遠し
されど吾は吾が道を究めんと欲し
たとへ雲の彼方、地の底をも訪はん

双松会卒業50周年記念総会開催される

関戸　信次
鈴木　直三

50周年記念総会が10月30日に開催された。数多い行事の中でも「思い出めぐり」はユニークな試みの一つであった。50年前、わずか14～15才の少年が、国策とはいえ、学ぶことを返上して勤労動員に汗を流した思い出の場所、今どう変っているのだろうか。

この日、ツアーには最適とはいえない天候だったが、担任教師だった加藤清次先生を交え、一行23名は、小松航空隊の基地へと車を進めた。

当時、舞鶴海軍施設部（舞建）が建設を急いでいた軍用滑走路は、今は小松空港と共用の滑走路として利用され、その傍らに第6航空団の基地があった。基地の広報課員の案内で、昭和19年建設の掩体壕を見学、さらに資料室で、現在一機百億円のイーグル戦闘機が、常時50機も待機し、日夜訓練に励んでいる旨、説明をうける。見学時間が正午近かったため、基地内食堂で隊員食を試食、昭和19年当時我々が口にした大豆入り食事を思い出しながら感慨にふける。しかし思ったより質素な食事内容だったのが印象的。もっとも地上勤務の隊員とパイロットとでは全くの別メニューと後で知り、納得……。

第2の見学地、草野海岸は当時滑走路建設用の骨材として使う予定の砂利を運び上げる作業に従事した思い出の地である。5月の炎天下、

短歌　シアトルを詠む

北山　寛子（県女27回）

言葉にて聞くのみなりし雁行の正しく飛ぶをカメラに収む
馬酔木咲き連翹の花花桃とシアトルは一気に爛漫となる
シアトルの庭に馬酔木の咲きたれば飛鳥の里の思ほゆるかも
胸朱きロビン一羽の紛れこみ浅春の庭さわやかになる
家居して向いの桜仄めくを三分か五分かと日を過ごしけり
シアトルの青空に映ゆ桜花ゆさゆさ揺れて王者の風格を見す
シアトルの空渡り行く百武彗星日本名嬉しと孫と見上ぐる
餌に寄る鴨の胸肉うまそうと隣家の庭がうろつく小庭
四十雀をキチジと呼べる国にいて群れ来る小鳥の名は知らざりき
収容所の短歌も載れる八月の日系新聞胸痛く読む

シアトルの桜

焼け付く砂利浜に板を敷き、2人一組のモッコに砂利を入れて運び上げた作業の現場は、今や跡形もなく、波浪による侵食は50年の時の流れを語る。

つづいて母校を訪れる。鈴木校長から現況と今後の校舎改築計画等を聞いた後、青雲の小径を逍遙、当時防空濠を掘った桜並木の下を歩き、天守台に佇む一行の脳裏には各人各様の想いがかけ巡り、万感胸を打つ懐旧の一刻。

旧大中文庫をはじめ、講堂や旧校舎正面の建物（現在記念館として使用）を見学し、最後の思い出の地、小松製作所（現コマツ小松工場）へとバスを進める。

近代的な施設、設備に変ったとはいえ、雰囲気は当時と変らない。潤滑油の匂い、クレーンの音も懐かしい。ベルト付きの旋盤、フライス盤、ボール盤などは今やMC旋盤に代わり、コンピュータ制御の工作機械に置き換っていて働く人の数の少ないのが妙に違和感を生むのも時の流れのなせる術か……。我々が働いていた機械工場は取り壊されてはいたものの、仕上工場は現存していた。

50年間、打ち寄せた日本の近代化の波は、見かけ上、わが青春の一頁を変え去ったようではあるが、我々の心に残っている思い出の一齣までをも変えていないことを痛感させる思い出めぐりではあった。ただ今回時間の都合で遊泉寺の石窟を訪れ往時を偲ぶ機を得られなかったことが唯一の心残りであった。

この後、バスは一路島町の願成寺へと向う。ここで先着の十数名の同窓生と合流、物故者法要を営む。森本昭栄、塚谷宣也両君の読経に始まり一同順次焼香、38名の霊前に昔日の面影を追う。38名の物故者のうち18名がここ2年間での逝去と聞き、50年の歳月の流れが確実に我々を老境に誘いつつあることを否応なしに痛感させる。今回の総会への出席を予定しながら、直前に逝った友もあり、無常を思い冥福を祈るのみ……。

いよいよ最終目的地へ。総会の会場は山代温泉白山菖蒲亭、到着時には既に多数の同窓生がチェックインを済ませており、早速あちこちで久方振りの邂逅を歓び合う光景で瞬時にしての賑わい。

総会では勝木育夫会長の挨拶に始まって定番の会務報告も早々に懇親会の開宴となる。加藤清次先生に加えて、白尾龍之助、松原正一の両先生と小松製作所での指導教官であった山本敏氏の同席を得、開宴に先立っての回想のスピーチを頂戴、後は待ちかねたように盃を酌み交わし談笑の渦に包まれる。過ぎ去し青春時代の想い出から現在の生活環境、更には未来への熱い思いなど正に談論風発、話題も時と空間を超えて駆け巡る。半世紀の時の流れは逆流し、誰の瞳も輝き童顔が甦る。「友ありて遠方より来たる、亦楽しからずや」……。

あの夜あの刻、みんなで声を合わせて歌った校歌、青雲の大志を秘めた門出の歌は、永劫に我々同窓生を結び合わせる赤い絆の糸となってこの胸中に生き続けることだろう。記念誌「双松の賦」と共に、かくてここ北陸の出湯山代温泉の夜は喧騒の中に更けていくこととなった。

翌朝スタートのゴルフコンペも晴雨交錯する悪条件の中ながら成功裡に親睦を深めて終結したと聞く。

再会の日、次回の総会の又会うことを約したことを忘れずに、互いにその日までの自重自愛を心がけよう。

同窓の兄等よ！　今日の歓び、楽しみを再びと願って……。

（中学44・45回）

大中文庫からの道

林　滋

私達が旧制小松中学校を卒業してから五十年が過ぎた。

敗戦三か月前に、父が戦死したので、当時十四才、子供四人の母子家庭の長男には、進学など思いもよらず、四年で中退を考えたが、友人に励まされるままに最終学年に進んだ。

受験に無縁となった一年は、校舎正門脇の自治会室を根城に教室と大中文庫を往来しながら生徒会長職を務めた。

その一日、ふと手にした語源辞典の一頁が私の一生を決めた。それはEDUCATE（教育する）の語源がラテン語でto lead out from～を意味すると言うことだった。「教育」を教え育むと言った在り方に疑念を抱いていた当時の私には晴天の霹靂であった。子供の内なるものを導き出すことこそ本来のEDUCATIONなのだ。そう信じた日から、折角機会のあった教職を放棄して、長男として生き、死んで行かなくてはならない故里で周辺の子供を集めての社会教育（いまの生涯教育に当たる）を始めた。十五年間、三百五十余の小・中・高生と接したが、モットーとした〝FOR THE OTHERS〟は子供の心に残ったと思うし、私自身にはto teach is to learn。教えることは学ぶこと。と言う信条を体得させてくれた。

あれから五十年、「人生四分割法」で自らを律し、生きて来たが、その中には、小松高校、小松女子高校、石川県のPTA活動で会長職等をお預りし没頭した十余年もあった。

今もなお悔いなく生きている毎日が、あの母校の図書館「大中文庫」での一瞬に負うものであり、さらに今なお親交を頂いている先輩、後輩各位のお力であることを思うとき、天守台はじめ学舎に寄せる感謝の念は尽きない。

（中学46回）

民話を語りついで

嵐　美代子

「民話グループ青垣」と名付けて、小松を中心に加賀南部の埋もれた民話の掘りおこしを始めてから二十三年がたちました。

最初は「民話のこころを知る」という基礎学習をし、その後昔話の伝承者を求めて、北は手取川から南は大聖寺、山中の奥まで採話に歩き廻りました。そのうちに、幼い頃母や叔父から聞いていた昔話の数々がよみがえり始めるともう楽しくてのめりこんで行ったのです。

昭和五十二年には「加南の民話」として、民話九十七とわらべ唄等を記録することが出来ました。

最初の目的は、聞いたままを記録することでしたが、語り伝えたいという思いが次第につのり、素語りの他にO・H・Pを用いて保育園や公民館に出掛けるようになりました。

その後、平成四年に「加南の民話」第二集を出版しました。また、国民文化祭の手作り絵本に応募して、昔話十篇を紹介し佳作を頂戴しました。

現在は、十名で月一回図書館と老人施設で語りを続けています。また、ミュージック・ラボで小松市の伝説をCDに吹込みました。

沢山の情報がとび交うなかで、失われつつある方言を大切に残したいと思い、「小松のむかしばなし」を間もなく出版します。百話はすべて私共が採話し再話したものばかりです。

（県女30回）

変革の中で

柴原智恵子

多感な少女期を過ごした懐かしい校舎も、校庭のプラタナスも、今ではもう目にすることは出来ず記憶の中での貴重な風景となって、より印象を深めている。

振り返ってみると、私達の世代は戦争の影響をまともに受け、小学校に入学したのに途中で名称が変更されて、修了したのは国民学校。修了式では『蛍の光』や『仰げば尊し』の代わりに『御民われ』と『海ゆかば』を斉唱し、国家主義と必勝の信念をより強く自覚させられたのであった。

女学校に入学後も、勉学のほかに勤労奉仕の稲刈りや、防空演習、竹槍訓練などにも真剣に取り組む日々であった。

校庭に防空壕を掘り、もっこ担ぎも新しい体験であった。

夏休み中は軍馬に送る干草つくりに、来る日も汗にまみれての草刈り。初めて持った鎌で格闘していたような思い出。いつも一緒だった友人や梯川の堤防の情景が今も鮮やかに甦ってくる。

次第に戦局も緊迫し、遂に校舎が工場化。足踏みミシンのほかに動力ミシンが十台程設置され、机の取り払われた教室、悲しいと思う感傷の許されない時代であり、既に半年以上も前から軍需工場に勤労動員されて、学校を離れて働く上級生の方々に比べれば通い馴れた校舎での軍服縫製は大変に恵まれていたと思う。

二年生の夏、戦争が終わり学校は本来の姿を取りもどした私達は勉学に専念出来る日々を喜び、希望に燃えていた。

翌々年、六・三・三・四制の学制改革が実施。その年四月には旧制高女の入学は中止。（中学まで義務教育となったので）

新制高校二年生になる前に四年間学んだ小松高女に別れを告げ転校し、変革の波にもまれた時代を痛感した一年であった。

（県女37回）

二人でオレゴンへ

大田ふみ子

成田からのオレゴン州ポートランド行きデルタ航空はもう座席の余裕がなかった。

十年以上海外に出ていない私たちがオレゴンへと旅立ったのは、ポートランドに住む娘の案である。夫は五年前に病で、右半身不随で歩行も困難になった。私は昨年、内臓を手術しようやく元通りになれた。私たち夫婦が病に負けずに元気な生活をし、オレゴンまで行く体力があるかどう

短歌

父　二代　八十吉を偲ぶ

上田　邦子（高校7回）

九谷焼一すじにわが生き得しは妻のおかげと父述べませし

昭和五十三年　金婚式

天性の音痴そのまゝうからゝに小唄の披露なされし事も

金婚式のお色なおしにおそろいの加賀の出で湯のゆかたに在しき

日展に出品されし絵皿なりこの大き絵を描きしはわが父

大皿の緑なす地に描かれし金色の稲光りかゞやく

真命の終えなむきわを筆持てと卒寿の父のなお意欲見す

黄泉にても絵付けほしいまゝなされかしその生涯を貫きし如

か試すための旅である。

国内の空港では身障者を車椅子で運んでくれるのはすでに知っていたが、米国ではどうだろうか。ポートランドに着くとそんな不安は吹きとんでしまった。制服の女性が待機していてくれ、最後まで車椅子で移動を手伝ってくれた。

オレゴンは素晴らしい土地だった。街を走っていて目につくのは、緑一色の中ところどころに白ペンキを塗った住宅が見えかくれし、絵に描いたような風景だ。街路樹の種類も多く、チェリー、アメリカ楓（ふう）、ヒバ、モミの木等どの木も太く、大きく育っていることである。アメリカ楓のプロペラに似た種も、なんと長さが十一cmもあり、枝がたれ下がる位実をつけていた。土地が広いので、ショッピングセンター、デパート等は平屋建である。州にはマウントフッド山（三四二四m）の高い山が一つ、山の近くまで車で登ることが出来頂上にはまだ残雪が多くあった。

オレゴンにいた十日間、私たちは娘夫婦や孫達の案内で楽しい日々を過ごし、空港では丁寧に扱われ身障者でも無事海外旅行は出来ると安心し、同時に感謝の気持ちで一杯だった。

（市女18回）

小松同窓会総会開催

平成9年度小松同窓会総会は、7月14日午後6時から、ホテルサンルート小松で開催されました。今年は、百周年記念大会が近づいていることもあってか、過去最高の二八九名もの会員が参集しました。

会員、教職員を前に、まず徳田八十吉会長が挨拶に立たれ、平成11年の創立百周年に向けて、より一層の協力と団結を呼びかけられました。

次いで、鈴木英章校長より挨拶を頂きました。

その後、例年通り、平成8年度の会務報告と決算がなされ、続いて平成9年度の予算案の説明と承認がなされました。

その後、百周年記念大会の日程が発表され、又、百周年実行委員会のメンバーの発表、同窓会事務局長の紹介などが行われ、近づく記念大会への期待感が高まりました。

亀田作雄氏（中学22回）の「乾杯」で開始された懇親会も例年どおり和やかに進み、四校の校歌を斉唱した後、仲井信雄氏（中学42回・前会長）の音頭で万歳を三唱し、閉会しました。

総　会

第7回関東小松同窓会総会開催

去る平成9年8月30日（土）12時より、東京日比谷の帝国ホテル「富士の間」において第7回関東小松同窓会総会（旧小松中、県立小松女、市立小松女、県立小松高）の総会ならびに懇親会が開催されました。

当日は残暑厳しい日和ではありましたが、本部から徳田八十吉会長ならびに鈴木英章校長が出席され、多数（四六二名）の同窓生諸氏が参集致しました。

総会はまず故人に黙禱を捧げ、ついで関東小松同窓会本谷勇会長が挨拶に立ち、多数の出席に感謝の辞を述べられました。続いて会務報告、役員改選の提案に移り、本谷会長より、次期会長として、白江治彦氏（高校8回生）を推薦したい旨提案があり、満場一致で承認されました。白江新会長の就任挨拶の後、懇親会に移り、藤田精一氏（旧小松中）の乾杯の音頭で開宴しました。なお、本谷氏には引き続き顧問として会の運営にご尽力願うことも合わせて了承されました。

会場には、各学年別のテーブルを作り、3年ぶりに再会した級友達となごやかに談笑され、昔話に花を咲かせました。また、「お楽しみ抽選会」として、同窓生有志よりご提供頂いた景品の抽選会が行われ、徳田八十吉会長からの「花瓶」、白江新会長からの「囲碁に関する著書ならびにビデオ」など多数の景品が提供されました。

あっという間に2時間が過ぎ、今回の総会担当幹事の学年（高校20、21、22回）の紹介と、次回の総会の幹事（高校23、24、25回）の紹介のあと、校歌斉唱で終宴となり、3年後の再会を約して閉会となりました。

江守利博（高校20回）

小松高校八回、十回生有志合同コンパ

―ふるさとの味を賞でる―

「小松の食フェスティバル」

十月三日（金）

食欲の秋、馬も人も肥ゆる秋…。

何とはなしに、懐かしい小松方面の味と話を肴に「再びチョッコリヤルカ…。」と、小松高校八回、十回生有志が集りました。

会場は常もお世話になっている竹橋の毎日新聞社ビル内、八回生岡田晃氏経営の「花」を借り切り余人を混じえず、27名が出席、10月3日18時より宴が始まりました。

白江治彦（八回生）小松高校関東同窓会新会長も仕事を早々に切り上げ参加。冒頭にご挨拶。大阪から住友電工役員中野信之氏、第一実業専務新倉信征氏、秋田から住友ベークライト秋田事業場長岸本栄太郎氏なども上京中で急拠出席した。更にその頃も今頃も加賀美人で心優しい女性が五人も加わり色どりとふるさとの家庭的雰囲気を醸し出して頂きました。（中にはその頃デートし語らった人達が、その後の四十年の来し方を微笑ましく語り合っていました）

食は「どぜうの蒲焼」「コンブ巻き」「河豚・鰯のコンカ漬」「小松のキャラ蕗」「小松の沢庵」等々に「小松のうどん」「ウナギの蒲焼」東京風の食も加わり、酒は「手取川」「菊姫」「萬歳楽」……。と小松の食フェスティバルモードの数々を岡田氏が本業のツテで集めコーディネートいたしました。その上、阿戸則子氏が女の心意気で手作りの「とうがんの煮物」「小松風キンピラ」を持参。おかげで懐かしいあの頃、今頃、仲間の事、仕事の事、此の小松の食の話等でボルテージは極限迄上がり、延々と果てる事なく五時間近く続きました。

ヘロ〳〵になる者もいましたが、無事終了。互いに「エーんな、またヤッか…。」と云って解散しました。

尚、出席者は27名……。

大垣弘光（高校10回）

『小松高校百年史・回想編』の資料・原稿募集について

このほど百周年記念事業の一つとして『百年史』の刊行が企画されました。

本編（沿革史）および資料編は、学校側の委員（教員）の手によって着々と進められています。

一方、同窓会側の委員は、回想編を担当することになり、中学・県女・市女・高校各部の校友誌をはじめ、各種新聞雑誌などから資料の収集に努めているところです。

しかし、委員のみの力には限度があり、多分に貴重な資料を見逃す恐れもあります。また、いままでに記録に残されていない、埋もれた事件や出来事も数多くあるのではないかと思います。

そこで、広く同窓会員の皆様に呼びかけて、「回想編」に収録する資料の提出、および原稿の執筆をお願いしたいと思うに至りました。

卒業生の皆様は、在学中、種々の事件に遭遇したり、忘れられない体験をお持ちではありませんか。そんな中で、「沿革史」や「資料編」に収録されない――取り上げられない性質のものも少なくないのではないかと思います。そうしたものを「回想編」に収めることによって、『百年史』の奥行きを深め、それに彩りを添えることができればと願っています。

このことは、すでに各期の常任委員の皆様に各期のお世話と取りまとめをお願いしてありますが、ここに『天守台』紙上をお借りして、改めて広く会員の皆様にお願いする次第です。

◇第一次集約期限は、平成十年八月末日を予定しています。

◇問い合わせ・提出先は、小松高校内、百年史編集委員会。

◇資料については、在学中の自分のこと・友人のこと・先生のこと・学校・学年・クラス・部活動・課外活動、学校内外を問いません。事件や体験のみでもかまいません。その文章化については、ご相談のうえ執筆者を決めさせていただきます。

同期・同級・同通学区・同部（含同好会など）で座談会を実施してくださっても結構です。

ただ、感傷的な回想などは除きます。

◇収録の最終決定は、編集委員に一任してくださるようにお願いいたします。「沿革史」や「資料編」、また回想の内容の重複などを勘案して決定したいと思います。

◇『小松高校六十年史』・創立八十周年記念『回想録』からの再録、各種雑紙からの転載なども考慮に入れたいと思っています。

（百年史編集委員会）

同窓会の開催について

各期・各ホーム等で同期会、ホーム同窓会等を実施された場合は、代表者の方よりのご一報をお待ちします。逐次、会報に掲載いたします。

その場合は実施日時、場所、参加人数、話題となった事柄など概要を簡単にお知らせください。葉書でも結構です。

また、同期会、同窓会を予定されている場合、学校要覧（毎年の学校現勢を記したパンフレット）を御希望により送付いたします。必要とされる場合は、あらかじめ、必要部数を同窓会本部に御連絡ください。

小松高校記念館

本部だより

明けましておめでとうございます。

昨年11月、同窓会事務局に埴田勉事務局長を迎え、12月には、「小松高等学校改築整備構想策定費」が、県の予算に計上されました。百周年に向けて環境が整いつつあるように思います。

本年も同窓会報「天守台」に変わらぬご支援・ご指導のほどよろしくお願いいたします。

同窓会事務局長に着任して

昨年十一月に着任して、早くも二ケ月を経過しました。

現在の私の頭の中は、もう母校百周年を迎えるに当っての記念行事や事業のことで、一ぱいになっています。

四十年の会社生活に自ら終止符を打ち、毎日が日曜日になって間も無く、思いも掛けなかった学生時代の先輩からの誘いで、金沢演劇人協会が九月末から十月初旬にかけて公演した「能登麦屋節考」に参加し、実に三十年振りに舞台の味を再体験。

その余韻に浸っている時、今度は高校時代の同期の方々から「あいつは、放っておくとボケるぞ」と本当に好意あふれるお誘いを受け、四十数年振りに、母校の校門をくぐることになり、昨年は全く思いもしなかった事が、二度続けて、おこりました。

勤務の当初は、厳しい企業間競争の中で染みついた垢は、そう簡単には取れるものでなく、いろんな場面で戸惑ったり、驚かされたり、失敗したり、時には突き当たったりで、結構疲れたものですが、その都度、周囲の暖かい御指導や、見守り、励ましに支えられて来たお陰で、今では、仕事に確かな手答えと、やっと少し軌道に乗って来たな、と感じ始めております。

学校という抜群の環境の中で、天気の好い昼時など、桜並木を天守台に足を運ぶと、高校二年の早春、クラス全員で写真を写した時のバックにした石垣、書道部で先輩の方々と一緒にとった蔦の生い茂る石段など、懐かしく想い出される。これも天守台が昔のままの姿であるからでしょう。台上から西の方を眺めると、私が生まれ育った鶴ケ島町がジェット機騒音で集団移転したあと、市の下水道終末処理場と雑木林になって様変りしているのに一抹の寂しさも禁じ得ません。

閑話休題。

今や百周年まで指折り数えて、あと六五〇日を切りました。

いよ〳〵我が身に鞭を加え、限られた期間を、最大限に生かし、着実にゴールを目指さなければなりません。

同窓会の皆々様の、一層の御支援、ご鞭撻をお願い申し上げます。

埴田勉（高校4回）

第16号の原稿募集

◎〆切　平成10年4月30日
◎内容　自由（在学中の思い出、近況報告、趣味、紀行文、俳句、短歌等）
◎長さ　六百字程度
◎送先　同窓会事務局宛
◎発行　平成10年7月

お知らせ

小松同窓会会員で、ここ一、二年にあらゆる分野（県内は勿論、県外の地方自治体等）において表彰を受けられた方、又受賞なさった方をご存じの方は、同窓会事務局まで是非ご一報下さい。